

重要な書目をあげて其解説を施したものであるが、この種の研究については初めての業績といふべく、「能登半島の人口地理學的考察」(大橋英男)も亦その靜態と動態とを詳述し、本邦海岸砂丘固定作業史の斷片(小牧實繁)は日本各地の砂丘とその歴史を集録し、「太田盆地」(朝永陽二郎)は美濃太田盆地が和名抄時代から開拓の進んだことをつげ、「大阪市に於ける工業の分布」(別枝篤彦)は大阪市に於ける工業分布狀態を明にしたもの、「筑後川流域平野の溝渠網に就て」(三友國五郎)は其史的發達から現狀に及ぶ變遷と自然地理との關係をのべ、「有度山の茶業に就て」(山口平四郎)は靜岡縣茶業地の發展を語るもの、「臺灣に於ける灌溉排水」(渡邊久雄)は臺灣に特有な埤圳の歴史とその現況を語つて各地域の排水區とその分布を明にしたもので、凡そ九篇菊版三百三十頁の大冊子である卷末に「南洋トラツクの民家(島之夫)についての報告がある。全體を通じて眞面目な有益な論文集であることを、同教室のために祝福する。(藤田)

○山東經濟事情

外務省通商局發行
海外經濟事情附錄

本書は通商局に報告された青島總領事館で島津理事の努力にかゝる熱心な調査の結果であつて山東省の經濟地理に關して、正確と微細とを極めたものである。第一章概説は大體の地理を論じ、第二章は外國の權益をのべついで港灣・海運・鐵道・金融・貿易・商業・通信機關・交通路・工業・農業・鑛業・漁業・

水産・畜産・重要物産の十八章にわたり深切丁寧を極めた經濟地理書、四六倍版四八八頁の大冊子である。支那の多くの省別地理志の中でも、この本位正しくして且有益な本は稀であるといふべきであらう。(藤田)

○朝鮮歸化族の發展

朝鮮總督府 善生永助著

このパンフレットは雜誌朝鮮、昭和九年七、八、九月にのつたものを集めたもので、非賣品であるが、我國に歸化した朝鮮人の古代に於ける歴史とその姓氏をまづ姓氏錄から拾ひ出し、ついで地名から近畿に於ける歸化民族部落のすべてを風土記や和名抄から抽出し近畿の外、關東・北陸・東北・中國・四國・九州と小口おしにしらべたものである。その最も新しいものは征韓の俘囚で陸摩に入つた苗代川の二十二姓などをはじめ、九州に残存する多くの遺跡をさぐり、これらの多數の韓民の子孫が、いかに日木に同化したかといふことを明にしたものである。(藤田)

雜報

○ロシア沿海州の漁業權と日本人

現在ロシアの

沿海州漁業權は、日魯漁業株式會社を中心とする、カムチャツカ沿岸の鮭・鱒・鯡・蟹等の漁撈と製造を營む權利であるが、この權利が日本人の手に歸するに至つた歴史は簡單ではない。一派の政商の手に任すべきものでなくて、太平洋上に於

ける生命線として注目すべき権利である。ロシア人がシベリヤを開拓したのは毛皮獸の捕獲にあつたが、日本人が同時に北太平洋沿岸を開發したのは、全く鯨・鮭・鱈・鰯・蟹・昆布等の魚介を漁るためであつて、ロシア人が森林を突破したやうに日本人は十七世紀中期から日本海の狂瀾怒濤の中に入つて、樺太・アニワ灣に漁場を開いたので、勿論樺太は日本領と思つてゐたところ、一八五〇年代からロシアの極東經營が活潑になり、ロシア人が北樺太に入りだした。樺太の國境決定について江戸幕府の苦心は甚しかつたが、内に政治の不安があつて、一時樺太は兩屬の地となり、やがて明治七年に樺太をロシアに與へて、千島を日本にとることになつた。當時百年この方樺太に日本人の行つてゐた漁業權は之をロシアに認めさせたにも拘り、日本政府の出先き官憲は之を放擲して引上げを命じたものであつた。そこでアニワ灣の漁民は歸つたが、

西岸の眞岡一帯は鯨の本場であつたために容易に歸らず、すつたもんだの末漁民は二萬圓の涙金で引きあげた。これ實に開拓使廳の失敗といへる。しかし日本人が一人も行かぬとその主要産業たる樺太の水産が絶えるので、ロシアも明治八年以後日本人の出漁を歓迎した。しかし明治十五年以後日本出漁者の利益をみて、日本人に課税をはじめた、が最初は安かつたから之を出した所、明治十七年に重税をかけたから日本人の多くは引返した。そこでロシア政府も十八年以後適當な課税に改めるに至り、樺太の日本人は、更にニコライエフス

ク及カムチャツカ方面に進出しはじめたので日露戰爭以前にこの方面に於ける漁利は、一年に七千人、十萬石以上の漁獲に達した。

そこでロシアは沿海州の日本人の漁業權を奪還しやうとすると同時に、アストラハン又は芬蘭の漁夫を移民して對抗しはじめた、明治三十二年には、外國人の出漁を禁止した、全く日本人を排斥するに至つた。こゝに於て明治三十三年日本の衆議院は、ロシアから輸入の魚類に非常に高い税金をかける法律を可決したので、當時ロシア人の漁業は、日本人のやつてゐる鹽引鮭で、日本にしかうれない品物であつたから、日本がさうした關税をかけるとロシアの漁業家が倒産するといふデレンマにかゝり、止むなく日本人の漁業權を認めるに至つた。其後も壓迫の手を弛めなかつたが、ロシア政府が壓迫すればする程、日本漁夫は反撥して、遂にはロシア人の日本漁夫屋敷を禁ずるといふことを申し出で、彼の無理な法律を延期したが、やがて三十七八年戰役となつた。所が勇敢な日本人は戰爭中でもかまはず、カムチャツカへ出漁する勢であつたが、明治三十八年ロシア全海軍を殲滅した日本は直ちに樺太占領(七月七日)をはじめ、三十一日に全島をとり日本人の漁業權を確定した、越えて日露講和會議となつて、ウィツテは日本國民が沿海州カムチャツカに於て漁業を爲す權利を認めたのである。かくて明治四十年日露漁業協約で、樺太南部漁場は勿論、沿海州四區の漁業權を得てオホーツク海

に進出しうるに至り、其漁獲物が日本仕向たる限り輸出無税としまつたのである。いづれにしても先人の慘憺たる苦心の結果であるが、ソウイェットになつてから、彼等は日本人が自分の領海の魚類を取つてゐるのであるとなし、この地方の水産業を徹底した統制の下におくやうになり、その製品たる鹽鮭や燻製はハルビン市場に於て日本品の及ぶ所にあらざる迄に發達せしめるに至つてゐる、日本の鹽引はかうして外人の嗜好に合はないのである故に我等はこゝで内訌を中止して、この漁業權は日本人が生命問題であるとして敢然としてソウイェットと争はねばならぬと思ふ、以上は主として田保橋潔氏の所論の要點である。(F)

○承德の税關

戰塵まだ治まらざるに設けられた承德税關はこの六月で滿一ケ年になつた、最初はすべて無秩序であつたが、この間に古北口と平泉に分關を設け、治安の回復に伴つて、灤平・灤源・赤峰等の町に分關をつくつた。ついで基隆に分關をつくつた、目下税關吏百六十名を越ゆるに至り、本年度收入計六〇八、三六九圓、豫算額三六六、〇〇〇圓より實に二十四萬圓以上になつた、輸出入合計五百四十萬圓の貿易があつたからである。

元來熱河省と河北省とは互に一國內の地方的の自給自足の貿易國をなしてゐたから、税關設置以後長城關稅線を以て分離せられたことになつたといへ、今猶地方的の農産物の出入が重で、河北省から下級綿布・食料品・簡單な金屬品・紙・葦

席等卑近な生活品が入るにすぎない。猶この地方は阿片の輸出を以て有名であつたが、其栽培收穫等はすべて地方官吏がやつてゐたところ、帝國になつてから今日の阿片制度に改善されたので、農民の利益は多くなつて、同時にその輸出が長城線にはなくなつたから、やがてこの省の輸出入は輸入額超過といふ形をとるに至つた、即ち今期輸入四百萬圓に對し輸出は百十萬圓といふ見當である。

輸入の綿布は河北省玉田縣林南倉地方の染色布で小規模の屋内手工業品である、食料品では洋麵が八十萬圓を第一とし大米・江米・茶・砂糖が輸入された、石油はアジアスタンド會社のものであるが事變後長城を越えて輸入するもの段々と減じ奉天から仕向けられるやうになつた、砂糖の如きも石油と同一系路に普遍化して奉天から出廻る日本産品に壓倒せらるゝに至つた。

熱河への貿易仕入地としては右の玉田縣林南倉で雜貨は殆どこの地から出る。其勢力は北平・天津を壓するものがある即ち熱河への輸入は林南について北平・灤州・平谷・遵化等の各縣から出で天津は十位にあるに止まるのである。

○山東棉花の増産

山東省では近年落花生其他の農産物價が慘落で農民が疲弊甚だしい折柄、其氣候が棉花に適するといふので最近省政府は大にその獎勵をはじめ張店を中心として其背後地十縣下にわたつて組合をつくり中國銀行と中棉歷記とをして棉作の財的援助をなさしめ、この兩機關の手

から米棉トライス種を配付し、一畝に六元乃至八元の資金を貸與し、其製品を買付けることにしたが、之に對抗して在青島日本側紡績業者・棉花業者も品質改良五ヶ年計畫をたて、在青島の紡績會社（鐘紡・富士紡・長崎紡・内外棉・大日本紡・日清紡）六社及支那の華新紡と東洋棉花、日本棉花外支那側の商店がその會員になつて張店に分所をおき、朝鮮から米棉種を輸入して、之を棉作地に配布することとした、本年度は朝鮮から米棉種子三萬五千斤を輸入し、博興・高苑の二縣の棉農に播種せしめたといふことである。

元來山東の棉花の在來種の植付は清朝以來盛んで今日は濟南を中心として年額百餘萬擔に達し、そのうち米棉は民國產零賣棉につぐ優良品で、十六番手に惜しく、二十番手から三十二番手の材料となる長毛である。在來種は短毛で十六番手乃至十番手に用ひられ日本向製綿用に適する、兩方とも山東棉は色の純白なることを特徴とし、青島紡績綿業は色が白といふので有名となつてゐる、その主産地は右の張店ではない。濟南の西部運河流域一帯で米棉に適し、恩縣・武城・夏津・高唐・清平・臨清・茌平地方に跨つてゐた。さうして濟南の東北部黃河小清河の流域たる濱州・北鎮・利津・蒲臺・高苑・博興一帯も亦棉に適し、運河の西北部河北省南部も在來種の良産地であつた處が、今回は山東鐵道の張店を中心にした濱州棉栽培を盛んならしめて濟南西部の米棉地以上の成績をあげるやうにつとめるのである。

○青島に於ける牛皮及臟腑

青島で屠殺した牛の皮は主として日本に輸出されるが、生皮は平均六十斤の重さがある、この生皮を買つた工場ではそのまゝ日光に乾かすものがあるが、大正五年以來日本人が鹽干皮製造を始めたので、大抵之に従ふことになつた。鹽干といふのは中高又は傾斜せる明地盤の上に生皮の内面を上につけてひろげ、鹽を撒布して、逐次その上に積みかさねる、つまり露天で鹽漬である。すると約三日間は盛んに水分と血液が流出し、五日をへて流出がびつたりとまる、皮の内面が白くなり硬化して粘着性を失ふ、かやうにして水分を出したあとで、日に乾かすのである、鹽は生皮一枚に二十五斤位を要する、又土干皮とて支那人が鹽漬にした後を石灰又は粘土で塗つたものがあるが、各品とも大皮（三十斤以上）・中皮（十六斤以上）・小皮（十五斤以下）に區別して賣る、土干皮は二割方安價で小皮はボックスの原料となる。

内臓の處理は、屠殺業者自分で工場をもつものゝ外、内臓取扱業者が買つて處理する、無舌の頭・胃・肺・心臓・肝臓・脾臓・直腸及生殖器をまとめてかう、この外大小腸・血液・尾・舌及内臓脂肪を加へてかうものもあるが、前者は三圓五十錢内外の價である。後者は十二圓程する、頭は角を切り、頭蓋骨を分つて腦を分離し、其他は大釜中で煮つて肉をはなす、平均七斤の肉がとれる、肺・心・肝・胃・脾・直腸は大釜で煮沸し労働者の食料とする、頭肉を合して一頭平均廿五斤。

小腸と大腸とは内容物を除去し、周圍脂肪を分離した後小腸・結腸・盲腸に區分して獨・英人にうる、獨・英人の工場では内面の粘膜を除去し清潔にし、水を入れて破れをあらため、長さを計つて區分し、鹽漬として樽にいれて輸出される、一椀豚の腸は四千頭分、牛は二百頭である。腸は遠く支那内地からも買ひあつめるが、一年間に青島から三百樽内外、牛腸は腸詰にするし豚は腸詰の外に、ラケット又はワイオリンの絲に製する、腎臓は一頭分八錢中國料亭に求められる。舌は生又は鹽漬として日本に輸出される、一頭分六十五錢、尾は十五錢位で、勞働者の食用となる、脾臓や膽嚢はいづれも採油原料とする。

牛の血液は一頭分四十五錢、このかつた血を柳籠油紙張に入れ(百九十斤の重さ)販賣する、用途は魚網塗布で澁の代用になる。漁夫は一ヶ月一回位網を血液の中に浸して乾す、血液百斤に石灰約三十斤と若干の水を加へたものを紙片に塗布して油紙となし柳籠にはりつけて、その上を反覆四五回、日光にさらすと硬固となるから、其表面に豆油をぬつてかはかすすると油脂類及血液を盛るバケツになる。かうしたことは清潔を好む日本人には出来ぬことかもしれない。

○米國の竹林

米國の竹材輸入年額は約二百萬弗に上り南部のニューオルリンス、ヒューストン等の港へ日本竹が輸入されるが、米國はジョージア州サバナ附近で夙に竹の農場設けて研究した所氣候・地味竹に適し四十六エーカーの大竹

林ができ十年前から、農林省でこれを試験し、七月の初日にこの農場の生産品を以て、籠・ブラシの柄・ヨットの櫓・帆船・旗竿・釣竿・ラデオの柱・梯子等の製品をつくつて展觀をやつた、所が面白いことは米人が一旦箱をバスター・ソースなどで適當に料理せるものを味ふたものは、其珍味が忘れられないことがわかつて、最近は貴重な野榮として箱の養成が注目されることになり日本種の竹の外、諸國産の竹を集め二百七十五種の竹類を栽培してゐるといふ。

○テキサス州ラスク附近の石油

一八九〇年頃東部テキサス産の鐵鑽を以て一大製鐵創設の計畫の下にこの附近の土地二萬エーカーを買收しニューバーミンガムと名付けて一大製鐵市をつくつたが、事業が失敗したためにこの町はなくなつて、株主は廣大な土地を持て餘してゐたところ偶然に油井が発見された、堀下三十日を要し五千百二十呎から一大噴油があつたので、こゝに今の株主は地價の暴騰でもうけたところがこの油井から一五%ほど鹽分ある水が出たので幾分氣勢をそがれたけれども、猶附近地方試掘のため地價は段々高くなつてゐるといふことである。

○世界人絹の生産高

一九三三年には總額二億八千疋に達した、其分布左の如し(單位百萬疋)

國名	一九三一年	一九三二年	一九三三年
米	六三一六四	五六一五七	七二
本	二一	二九一三〇	四二

英國	二四—二五	三一—三二	三七—三八
伊太利	三四—三五	三一—三二	三五—三六
獨逸	二五	二四—二五	三五—三六
佛國	二〇	二三	二六
オランダ	八—九	八—九	一〇—一一
スイス	四—五	四—五	五—六
白耳義	四—五	四—五	四—五
其他	九—一〇	一〇—一一	一〇—一一

この表によると佛國は六位にすぎないが、二十年前には第三位であつた。日本は戦後の發達にすぎないが十年前百萬疋に止まつたが五年後千三百萬疋に達し今日は四千萬疋に達し世界第二位になつた、日本を中心とする生産過剩は歐洲の多くの工場を悲運に導いたが、國際間の協調で歐洲はこの危難から匡救されたといふことで、當分右の產出状態で持合になるといふ見込である。

○北米ヒューストン及びガルベストン

キサス產棉花輸出港としてのヒューストンは一九三三年の對日貿易三千二百四十萬弗にして前年に比して五百三十五弗を増加せり、即ち一九三三年のテキサス棉六十四萬四千四百俵

といひ、つぎにカーボンブラツク・屑鐵・古眞鍮・古レール等の輸出も毎年増加をしめす。そこで日本船の出入も多くなり一九三三年に入港五十七隻二十五萬噸に上り、米・英・獨について第四位をしめた。三井物產・郵船・國際汽船・川崎商船等の各社船の往復である。

ガルベストンはメキシコ灣内ガルベストン島にあり一八八九年築港をなし米國南部のテキサスの吞吐港であり、ニユーオリリンズにつぐ第二の貿易港となつてゐる。近年ヒューストンの發達に伴ひ往時の繁榮を奪はれたけれども尙南部第三位の港で硫黃の世界市場供給の約八割を積出す。

この港は輸入よりも輸出港で、輸入の二十數倍に當る額を出してゐるのは、主として棉花輸出による。一九三三年は一億二百八十萬弗の輸出があつた、硫黃は著増したが其他は減少したので八百萬弗ばかり前年とは少い。輸入は四百五十萬弗でバナ・砂糖・ジュート等が入る。

船舶の出入は千二百三十六隻に達し米國の船は第一位、百八十九萬噸に達し、第二位は英國船三十六萬噸、第三は獨逸の三十三萬噸、日本は第四位の二十八萬七千噸である。